

【巻頭言】

「英語教育の細波」

西田 正

大学英語教育学会中国・四国支部

事務局幹事

先日いつも声をかけてくださる A 先生から論文集を戴いた。タイトルは「細波」である。先生は 53 年の長きに亘って英語の教育と実践に携わり、幾多の著書と論文を世に出された。あとがきでは付属中学校・高校にはじまり、大学までの先生の歩みの一端が披露されている。先生は日本の英語教育の場にしっかりと根をはり、研究を続けながら、日本の英語教育の行く末を見つめて来られた。実に研究と実践が見事に調和してひとつの世界を築かれた。小学校から大学までのあらゆる段階での英語教育を研究の視野に入れて英語教育界をリードされてきた。

その先生の論文集のタイトルが「細波」であり、サブタイトルが「英語教育実践学の渚で」である。着実に研究成果を世に問われて来られた先生だからこそ、生まれたタイトルであろう。どのような意味をそれに託されたのかは定かではないが、ひとつひとつの研究は「細波」のように小さいが、それが積み重なって日本の英語教育の方向を変える大きなうねりとなりうることを先生は示されたのではないかと思う。また、先生の実践学は、全国各地で日々為されている英語教育の実践を見通す波うちぎわに立ち、実践への助言や示唆を与えて来られたのである。

このように A 先生のことを書いたのは、英語教育の研究に携わる私たちは、英文学や英語学と違って、研究と実践の乖離に悩むことが多いからである。自分の研究が実践の場でどのような成果を生むのか。実践に繋がらない研究には意味があるのか。大学教育の大綱化や国立大学の法人化以来、英語教育に対する要請が年々強まる大学において、英語教育研究者がその責任を一手に引き受けざるを得ない状況にあり、日々の研究と実践の統合が一層必要になっている。大学教員の自己評価においても研究は勿論のこと教育に関する活動も評価の対象になってきた。授業の学生評価制度を導入している大学も多い。学生の授業に対する期待度や満足度とともに学力の達成度を測ることも重要視されてきた。

ご存知のように 2007 年度の JACET 全国大会は中国四国支部が担当し、安田女子大学が会場となり「小中高大を見通した大学英語教育－ 一貫したカリキュラムを求めて－」のテーマのもとで、多様な研究と実践の報告が期待されている。担当責任支部として周到な準備心がけるためにも支部会員のご協力を切に願うものである。